地域とともに未来をデザインするマガジン／岩手県立大学広報誌

IPU MAG

Iwate Prefectural University Magazine 2014 Spring Vol. 59

［特集1］

ICTを復興にどう活かす？

仮設住宅支援員のためのPC研修システム開発

［特集2］

IPU-Eプロジェクト

IPU-研究室へようこそ!

IPU TOPICS

地域をつくる希望の星たち

県大いいね!キャンパスナビ

岩手県立大学

特集1

県立大×地域プロジェクト…［仮設住宅支援員のためのPC研修システム開発］

ICTを復興にどう活かす？ 自習可能なPC研修システムで次のステップに進める支援を

被災地の住民を「支援員」として雇用し、仮設住宅団地の生活環境づくりをサポートする「大船渡市仮設住宅運営支援事業」。この事業にソフトウェア情報学部のチームが協働研究として参画。支援員の未来の選択肢にもつながるPCスキル向上をサポートしています。

支援員のスキルとモチベーションを向上させる「PC研修」

仮設住宅で暮らす人たちが、健康で前向きな生活を送ることができるよう、環境づくりをサポートする「大船渡市仮設住宅運営支援事業」。北上市や民間人材派遣会社、NPOが協働で運営するこの事業は、地域住民を有期雇用の「支援員」として採用。仮設住宅団地の自治会運営サポート、住民向けの情報の周知などを行っています。

支援員の業務には、PCでの日報作成や業務連絡、団地内に掲示するチラシや広報紙の作成もありますが、年齢も職歴もスキルもまちまち。そこで平成24年9月、事業の「PCサポート部門」と、ソフトウェア情報学部組織情報システム学講座の後藤裕介講師を中心とするチームが協働研究を開始しました。「効果的な研修でスキルを習得できれば、支援員の方々のキャリアの後押しにもつながる。〝ひとの復興〟に役立つ研究になると思いました」と、後藤講師。まず、現状の課題を把握するために支援員のPCスキルと、業務に必要なスキル水準を調査・分析。その結果から強化ポイントを導き出し、研修に活用しました。

この研修によるスキル向上により、業務の効率化だけでなく、支援員のモチベーションもアップ。PC経験のなかった人が広報誌の作成まで行えるようになるなど、スキルを身につけることによって自信を得たり、仕事での達成感を感じています。

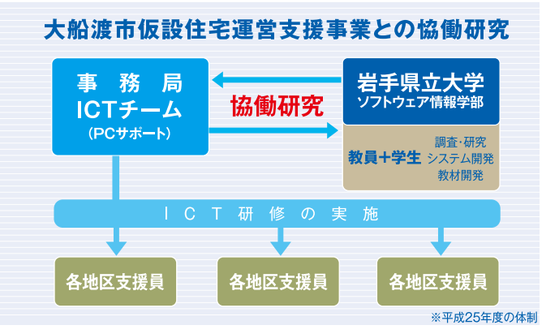
習熟度に合わせて学べるPC研修システムを、チームが開発

PC研修によって「できること」が増え、「任期終了後の就職に生かしたい」「資格を取りたい」など、次の目標が見えはじめた支援員。こうした成果をあげる一方、従来の支援員全体のニーズをふまえた研修方法やマニュアル作成から、支援員ごとに異なるスキルのレベルや個々のニーズに対応する必要性も感じました。

そこで協働研究チームは、平成25年10月から「個々のレベルに合わせて学べるシステムづくり」を開始。ソフトウェア情報学部4年（当時）の齊藤佳奈さんが、卒業研究の一環としてシステムの開発を担当しました。

「ひとつのタスクを達成するにはどんなスキルが必要か、その要素をひとつずつ抽出することから始めました」と振り返る齊藤さん。「メールを送信できる」「Wordで表をつくれる」などの質問にYES・NOで答えることで、「できること／できないこと」を可視化。課題を達成するごとにスタンプがもらえるなど、楽しみながら学べる工夫も加えました。こうして、未習熟または未学習の部分を重点的に、しかも好きな時間に学べるオンライン学習システムが完成。2月から試験的に導入を始めました。

「このシステムは、近い将来、研修に大きなコストをかけられないような企業での研修や高齢者向けの講座などにも活用できると考えています。暮らしや仕事、生きがいに役立つツールとして、さらに多くの人がPCを活用できるようになるきっかけにしていきたい」と後藤講師。ソフトウェア情報学部が目指す「人に優しい情報社会」の実現に向けて期待が寄せられています。



1 仮設団地の集会所で行われるPC研修の場でヒアリングを行う研究チーム。和気あいあいとした雰囲気だ。
2 支援員やPCサポートスタッフにヒアリングをする後藤講師（左から2番目）。
3 今回開発したシステム画面の一例。今後、試験運用の結果を踏まえブラッシュアップさせていく予定。
4 支援員がパソコンを使って作成したチラシ。「見やすいね」という団地住民からの言葉も励みになっているという。
5 PC研修システムの管理者機能について打ち合わせる、事務局のPCサポートスタッフと研究チーム。
6 研修でスキルアップしたことによって、パソコン操作もスムーズに。連絡用の文書も短時間で仕上げている。
7 「ひとつずつ、パソコンでできることが増えてきて楽しい」と話す支援員の村上千鶴子さん（左）と後藤春美さん（右）。

［協働者のメッセージ］

大船渡市仮設住宅運営支援事業事務局　鈴木 祥悦さん

これまでの研修は、他の業務の合間に大船渡市内に37箇所ある仮設団地を順番に訪問して行ってきました。そのため、使用する課題などの準備も含めると3ヶ月に1回の実施が限度。しかし、協働研究で開発された学習システムによって、支援員さんが自身のできるできないを認識して、それぞれのニーズに沿った課題を見つけ、自習することも可能になりました。「従来の寄り添い型のPC研修」と「システム」それぞれの利点を活かしながら、支援員さんの更なるスキルアップ、そして未来の可能性を広げるステップアップのお手伝いを、これからもしていきたいと思います。

スキルを身に付けた支援者のみなさんが、「できたこと」を笑顔で教えてくれるのがうれしい、と鈴木さん。

復興のためにITを使ってできそうなことは？

今回の特集テーマに関するアイデアをtwitterで募集したところ、復興状況やボランティアの情報発信、特産品のインターネット販売など、ITで復興を支援するたくさんのツイートをいただきました。その中からいくつかをご紹介します。

広報誌 × SNS
岩手県立大学公式twitterアカウント
IPU_official

東北以外では震災の記憶が少しずつ風化…みたいな話を最近よく聞く。それは報道される機会が少なくなってるせいだと思うので、メディアに頼らずSNSを通して今も続く復興の様子を（うまくいってることもいってないことも）どんどん発信していけば。@ta_mina

子育てを応援したい学生と、子守を手伝ってほしい専業主婦をつなぐサイト。「岩手の手つなぎサイト」とか。@inacabito

沿岸名物をインターネット販売 @sakencheese

【建設業向け】モバイル端末で工事状況（工事受付～施工～落成）までの状況を作業班ごとに共有する。進捗状況が瞬時に把握できる等メリットがあるかと。@hopper031

ビッグデータを利用し、過去の自治体・法人が行った事業全てを公開することで、民間企業の新規事業促進を図る @booooomana

これまで復旧復興してきた事業をアーカイブ化し、全国区へ情報提供する。@5shane7

復興状況をメールマガジンとして一般向けに配信する。@g031j005

被災地域すべての住民に端末を配布し使用方法が分かり慣れるまで説明。現在ある復興商店街にリンクするネット商店街を立ち上げて支援。“徹底”しなければ IT も使い物になりません。@etsu_etsu_etsu

エリアメールを利用し、一定のエリアに入ったときに身近でやってるボランティア情報の提供を行う。@mhf_1208

Comment

ITの可能性を改めて感じさせる投稿が多いと思いました。情報を可視化したり、ひととひととを結びつけたり、情報共有やビジネスのさまざまな場面でも、ITを使ってできることの可能性は無限大です。復興のためには今後もより一層さまざまなIT活用が必要とされていると思います。

ソフトウェア情報学部
講師 後藤 裕介

※誌面のスペース等の都合により、お寄せいただいたツイートのうち一部の掲載とさせていただいておりますのでご了承ください。

［特集に関するアイデア・ツイートの流れ］ twitter

特集を読んだご意見・ご感想も募集していますので、公式アカウントにツイートください。

1. 公式アカウントで「お題」を確認
2. twitterにアイデアをツイート
3. 投稿アイデアが次号誌面に掲載

※ツイートの際には、文末に「#ipumag（発行号数）」を付記してください。
「発行号数」は、本号では「59」、次号では「60」と変化しますので、「#ipumag59」「#ipumag60」のように表記してください。このことにより、様々なアイデア・ご意見を内容別にグループ化でき、誌面へ反映することができます。ご協力をお願い致します。
※皆様からのツイートは、本誌などで掲載させていただく予定です。ただし、誌面の都合により、全てを掲載することができない場合がありますのでご了承願います。

次回の「お題（テーマ）」はツイッター上で発表します。

一般の皆様、学生・教職員の皆様からのツイートを広く募集しています。たくさんのアイデアお待ちしています！

「IPU-研究室」へようこそ！

岩手県立大学は、地域のシンクタンク。学内では日々、様々な研究や教育活動が行われています。
こちらでは、大学全体を大きな研究室にみたて様々な研究教育活動をご紹介します。

◎研究・開発ストーリー
生産・情報システムの構築と評価を研究する昇高茂樹准教授と、コンピュータグラフィックスを研究する大志田憲准教授が、平成20年から共同で研究をスタート。当初は学内における電子メールを用いた安否確認システムの構築に取り組み、震災後は三陸地域にフィールドを広げて有効に活用できる情報システムの構築を研究。災害時に機能する“生きたメール”を取得し、地域住民が利用できるシステムにすることを目指し研究を進めている。

［研究メンバー］
昇高 茂樹 准教授
大志田 憲 准教授
※写真左から順に記載

今回の研究テーマ

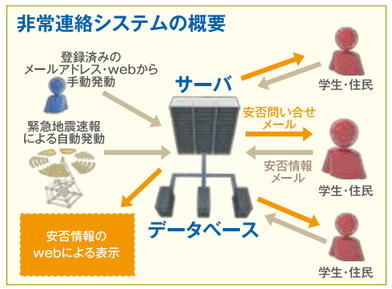
三陸地域情報システムの構築についての研究

宮古短期大学部
［昇高 茂樹 准教授・大志田 憲 准教授］

災害時の情報伝達にメールを活用し、相互にやり取りできるシステムを構築。

もともと津波や地震による災害が多く、早くから防災対策が行われてきた三陸地域。情報伝達に関しては、行政による防災無線が整備されていましたが、相互にやり取りができないのが課題でした。宮古短期大学部の昇高茂樹准教授と大志田憲准教授は、震災前から災害通信手段として電子メールに注目し、相互に伝達できる「非常連絡システム」の開発に着手。震災後は、三陸地域全体で利用できるシステムの構築に取り組んでいます。このシステムは、下図のように災害が発生した場合、予め登録してある地域住民等に電子メールを送信。これに返信することで安否確認ができる仕組みです。このシステムによって情報の伝達状況の把握や返答内容が簡単に確認できるようになり、現在、宮古短期大学部の学生安否確認システムとして導入されています。

非常連絡システムにリンクさせた避難所マップ。これに登録することで最新アドレスを保持する仕組み。



「非常連絡システム」の導入によって、学生の安否確認もスムーズに行うことができる。

非常時に有効なアドレスを得るため、普段から使える避難所マップをリンク。

この非常連絡システムで問題となるのは、災害時に確実に届く“生きたメールアドレス”の取得です。特に学生は頻繁にアドレスを変更することが多く、いざという時に使えるアドレスになっていなければ意味がありません。そのため普段から、最新のアドレスに更新する仕組みを作ることが必要でした。そこで昇高准教授と大志田准教授が考えたのが、PCやスマートフォンなどの端末を用いて避難所情報を提供し、アドレスを取得すること。避難所マップという必要性の高いシステムなら、日常的に利用され、最新のアドレスに更新できると考えたからです。このように非常連絡システムに避難所マップを合わせることで、災害時に有効に活用できる「三陸地域情報システム」。今後は、普段利用のための機能をさらに加え、地域での実用化を目指していく予定です。

（写真上）「はまぎく」による宮古市の観光イベントの支援。市民にアンケートを取り、観光ツアーの企画に役立てる。（写真下）「チーム☆遊佐」の住民報告会では、取り組んだ成果が発表された。

IPU-Eプロジェクト

学生の「やりたいこと」をサポートし、実社会で役立つ就業力を育てる。

「留学生を支える環境をつくりたい」、「児童養護施設の子どもたちを支援したい」など、様々な企画を考える学生たちがいます。このような学生の意欲に応え、実現までの支援を通して“就業力”を高める『IPU-Eプロジェクト』。学生の成長を応援するプロジェクトの内容をご紹介します。

平成25年度「IPU-Eプロジェクト」報告会では、多くのチームが活動内容を発表した。

看護学部生による「カッキー's」は山田町に出向き、月1回の訪問活動を行っている。

「学生ボランティアセンター」は西和賀町で除雪活動で小学生や高校生と活動した。

「IPU応援団～地域×IPU～」は滝沢市の高齢者大学「睦大学」との交流を行った。

プロジェクトの実現を通し、学生の成長をバックアップ。

授業、ゼミ、課外活動、アルバイトなど、学生はあらゆる場面で様々な知識と経験を重ねながら、「就業力」を高めます。社会や組織で必要とされる就業力を高めることを目的として、平成23年度から始まったのが『IPU-Eプロジェクト（以下Eプロ）』です。

これは地域・国際交流、社会貢献、地域活性化、経済活動などの分野で、学生自らが企画・計画・実行し、それらのプロセスを振り返り、評価・改善していくもの。キャリアセンターが窓口となって、実社会さながらに企画や予算、実行計画の細部に渡って丁寧に指導。これによって、学生の企画力や行動力を高め、人としての成長をサポートしています。

プロジェクト例1

宮古市の復興と観光を支援

平成25年度に採択されたプロジェクトの中から二つの取り組みについてご紹介しましょう。

岩手県立大学と盛岡短期大学部の二年生を中心とした「はまぎく」は、『おでんせ宮古プロジェクト』を発足。これは、被災地への関心が薄れる中、多くの人に震災のことを語り継ぐと同時に、宮古の観光を盛り上げることを目的として立ち上げたもの。観光イベントのお手伝いなどを行いながら、学生向けの観光ツアーの企画・実行をゴールに見据えています。

「当初、仮設住宅を使ったツアーを考えていたのですが、多くの問題があることがわかり、現場をリサーチすることの大切さを学びました。今年度は下準備ですが、来年度は実施の年。地元の人の話、ツアーを利用する学生の声などを聞きながら実現していきたいと思います」と、リーダーの香木なつみさん。宮古市民にもアンケートを取り、地元の声もツアーに反映させようと考えています。

プロジェクト例2

学生パワーで町を元気に

もう一つは盛岡短期大学部2年生で結成した「チーム☆遊佐」による、『地域おこしを学び隊！with地域おこし協力隊in遊佐』というプロジェクト。昨年5月から、授業をきっかけに関わった山形県遊佐町に出向き、地域づくりの支援に取り組んでいます。

彼らが注目したのは、町の暮らしに密着した多くの湧水。これを観光資源とするために、住民に話を聞きながら実態を調査。「企画段階は曖昧な点も多かったのですが、何度も内容を詰めて行くことで方向性が明確になりました。短期間でもしっかりと成果を残したい、そんな思いでみんな頑張りましたね」と、リーダーの畠山遥さん。

このプロジェクトの成果として、今年の2月に湧水マップのパンフレットを完成させ、遊佐町で報告会と住民との交流会を開催。今年度の経験を生かし、来年度も継続して取り組んでいく予定です。

このように様々なプロジェクトを通して、主体性や行動力、コミュニケーション能力などを養う学生たち。企画立案から実現後の報告まで、Eプロのすべてが成長のプロセスであり、学生の就業力の向上につながっています。

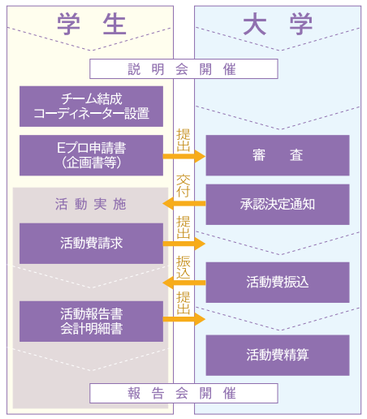
＜IPU-Eプロジェクト＞

学生自らの企画力や行動力により、就業力の獲得を支援する制度。学生でチームを結成し、考案したプロジェクトを学内審査の後、大学が活動費（最大30万円）を助成する。文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」採択事業として実施している。

■ 平成25年度の採択団体

◎One World ◎カッキー's ◎IPU応援団～地域×IPU～
◎チーム☆遊佐 ◎IPU未来授業実行委員会
◎Connect ◎はまぎく
◎学生ボランティアセンター 西和賀プロジェクト
◎地域貢献イベンターIPU～復興girls&boys*～

■ プロジェクトの流れ



［学生メッセージ］

香木 なつみ さん（はまぎく・総合政策学部1年）

企画の立案も予算の立て方も、プロジェクトの全てが初めての経験。キャリアセンターの職員の方に指導いただき、メンバーと議論を深めながら企画を形にしていきました。難しいのは、みんなの意見をまとめていくこと。それぞれ考え方も違うので、ベストな答えを見いだしていくのが一番大変であり、自分自身の勉強にもなっています。

［職員メッセージ］

松本 唯美 さん（キャリアセンター職員）

心掛けているのは、学生の意欲やチャレンジ精神をつぶさないようにサポートすること。初めてのことですからできないのは当たり前。いかに課題を解決するか、そのプロセスを一番大事にしています。Eプロを申請した時とプロジェクトを達成した後では、どの学生もかなり変化します。その成長していく姿を見るのがうれしいですね。

「学長奨励賞」授与式が行われました

2月6日に、「学長奨励賞」の授与式が行われました。この賞は「学業又は研究活動」「課外活動」「社会活動」等で特に顕著な業績や功績などをあげた学生に贈られるものです。今回は昨年度よりも多い34の個人及び団体が受賞し、中村慶久学長から表彰状と記念品が授与されました。

社会福祉学研究科
二瓶 さやか　日本介護福祉学会「奨励論文賞」受賞
髙橋 緑　リハ工学カンファレンスにて優秀演題で表彰

社会福祉学部
千葉 のり子　岩手県イーハトーブ学生赤十字奉仕団委員長として活動、全国赤十字大会で活動を報告

ソフトウェア情報学研究科
古舘 昌伸　情報処理学会全国大会「学生奨励賞」受賞
中村 武道　情報処理学会全国大会「学生奨励賞」受賞
菅原 遼介　教育システム情報学会学生研究発表会「優秀賞」受賞
杜 紹春　日本図学会東北支部講演会「最優秀発表論文賞」受賞 他
廣田 夏輝　情報処理学会全国大会にて「奨励卒業論文」に認定
秋元 泰介　International Conference in Artificial Life and Robotics にて「student paper award」受賞 他
荻原 勇一　情報処理学会全国大会「学生奨励賞」受賞、学会推奨修士論文に認定
對馬 直哉　映像情報メディア学会「優秀研究発表賞」受賞

ソフトウェア情報学部
川崎 拓海　情報処理学会全国大会「学生奨励賞」受賞
小林 凌　情報処理学会全国大会「学生奨励賞」受賞
松本 早紀　情報処理学会全国大会「学生奨励賞」受賞

総合政策学部
荻野谷 敬祐　気象予報士資格を独学で取得

看護学部
山本 千尋　ガールガイド・ガールスカウト世界連盟のアンバサダーとして活動

宮古短期大学部経営情報学科
永田 裕一　宮古市内小中学校の不登校生徒支援ボランテイアとして活動

弓道部
菊池 ひかり　国民体育大会弓道競技近的7位入賞

水泳部
佐藤 千紘　全国国公立大学選手権水泳競技大会200m背泳ぎ8位入賞 他
村上 勇輝　北部学生選手権水泳競技大会100m平泳ぎ第1位 他

将棋部
小山 怜央　東北六県将棋大会にて団体戦優勝、個人戦優勝 他

看護学部災害復興支援学生団体 カッキー's
山田町の仮設住宅等でこころと健康をサポートするための活動を継続して実施

社会福祉学部
小原 歩美、佐々木 陽子、藤本 澪、村上 祥子
「若年性認知症の人と家族のつどい」にボランテイアとして参加、その成功に尽力

ソフトウェア情報学部 チームIWAPU
紺野 和磨、鳴海 司朗、斉藤 裕之、菅原 健太、鎌田 恵介、今野 学、高橋 仁基
研究技術コンテストNTCIR-10において、音声ドキュメント検索性能MAP第1位

ソフトウェア情報学部 チームMonolith
菅原 誠、島本 直、赤川 徹朗、有村 佳樹、佐藤 亮、志知 謙次朗、六本木 和也
ETロボコン東北地区大会デベロッパ部門、総合優勝

総合政策学部 田島ゼミAチーム
石川 友絵、後藤 知佳、後藤 あゆみ、高橋 ひかり、藤田 奈緒子
全国大学政策ﾌｫｰﾗﾑにおいて「政策マネージメント研究所賞」受賞

総合政策学部 田島ゼミBチーム
佐藤 真之、佐藤 瑞穂、佐々木 瑠璃子、美濃谷 孝明
全国大学政策ﾌｫｰﾗﾑにおいて「全国大学政策フォーラム実行委員長賞」受賞

総合政策学部 伊藤英之ゼミ3年生
猪股 茉美、井上 卓也、佐藤 凌太、中村 順哉、山二 陽介、山口 唯
滝沢市立滝沢東小学校、一本木小学校、岩手町立川口中学校などで延べ9回の防災教育を実践

盛岡短期大学部生活科学科
赤澤 美智子、阿部 もも、横道 あかり　県北広域振興局実施学生ファッションデザインにおいて「最優秀賞」受賞
食物栄養学専攻2年生有志　コンビニとの共同による商品開発企画で、お弁当やおにぎりの商品を開発、販売

チームLiViNG WiTH
高倉 健介、吉田 悠、中條 奈菜花、菅野 智穂
アメリカ大使館及び慶応義塾大学主催全国ビジネスプランコンテストにおいて「優秀賞」受賞

全国公立大学学生大会参加
小原 裕也、山本 亜胡、古谷 彩華　全国公立大学学生大会において、中心的な役割を務め、円滑な大会運営に寄与

華道部
仮設住宅に花を届けると共に住民との交流など、花を通じたこころの支援を実施

IPU応援団～地域×IPU～
睦大学と本学学生との交流事業を初めて企画、実現

IPU TOPICS

人事情報

新任学部長（平成26年４月１日付け）
盛岡短期大学部長　佐々木　隆

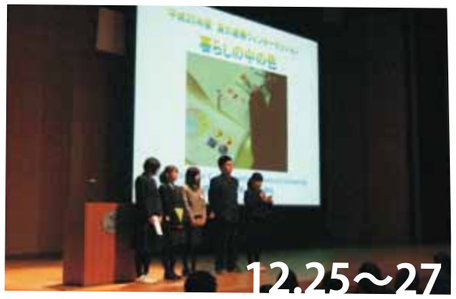
[教員の異動等]

退職（平成26年３月31日付け）
看護学部　教授　石川和克
看護学部　講師　堀篭ちづ子
社会福祉学部　教授　鈴木聖子
盛岡短期大学部　准教授　乙木隆子
宮古短期大学部　教授　菊池幸吉
宮古短期大学部　教授　高木隆造
看護学部　准教授　村松仁
看護学部　講師　相墨生恵
看護学部　助手　継枝悠
社会福祉学部　准教授　都築光一
社会福祉学部　准教授　山本克彦
総合政策学部　准教授　茅野恒秀
総合政策学部　准教授　金子友裕
盛岡短期大学部　講師　高泉佳苗

採用（平成26年4月1日付け）
看護学部　教授　高橋和眞
看護学部　講師　大久保牧子
総合政策学部　講師　金澤悠介
盛岡短期大学部　准教授　加藤哲子

「夢灯り」に包まれた冬のキャンパスで

岩手県立大学の冬の風物詩「夢灯り」が、12月13日に開催されました。白い雪に覆われたキャンパスをイルミネーションのやわらかい光が幻想的に彩る中、メイン会場となった学生ホール棟にはバルーンアートが飾られ、模擬店をはじめ様々な企画を実施。ステージでのサークルパフォーマンスでは、マンドリンなどの楽器演奏や合唱、ダンスなどが繰り広げられ、冬の寒さに負けない熱気で盛り上がりました。



自分の未来を考える、高大連携ウインターセッション

12月25日からの3日間、県内の高校生に大学での学びを体験してもらうことを目的とした高大連携ウインターセッションが行われました。今年度は、県内5大学で総勢604人の高校生が参加し、本学では全学部対応で262人を受け入れました。本学の参加者は、学部ごとに用意された学びのプログラムを体験し、その後、全学部共通の発表会で学んだ内容について共有しました。この3日間を通じて進路に対する意識を高めるきっかけとなったのではないでしょうか。（出版委員会・千田裕太）

滝沢市の未来をつくるプレゼンコンテスト

1月に村から市へと移行した滝沢市の将来像や夢を発表する「夢・絆・生きがいプレゼンコンテスト」が1月18日に開催されました。滝沢市内の高校生や大学生４組が「地域の絆と支えあいで目指す夢のあるまちづくり」をテーマに発表を行った中、総合政策学部田島ゼミの佐藤真之さん・美濃谷孝明さん・佐々木瑠璃子さん・佐藤瑞穂さんのチームが住民主体のまちづくりを推進していく「たきざわTIKARAプロジェクト」を提案。見事最優秀賞を受賞しました。

卒業生主催のミライトークカフェ開催

2月1日、学生食堂3階にて岩手県立大学同窓会主催のミライトークカフェが開催されました。このイベントは3年目の開催であり総勢30名の卒業生と在学生が"ざっくばらん"に話せるものです。当日は100名以上の参加があり、様々な分野で活躍する先輩に進路や学生生活、社会人生活のことなどを話せる機会となりました。参加した在学生は「今後の学生生活や就職活動にとても参考になった。」と語っていました。（出版委員会・堀田健仁）

「いわて若者会議」に本学の学生団体が多数参加！

2月16日に、岩手で活動する若者の自主的活動紹介と交流の場として「いわて若者会議」が盛岡市内で開催されました。多くの来場者で賑わう中、本学からも活発な活動を行っている学生ら8団体が参加してブースによる活動紹介・交流を行いました。さらに映画監督の大友啓史さんによる基調講演のほか、達増岩手県知事・大友監督・本学の研究科生を含む活動実践者らによるトークセッションも行われ、若者文化をテーマに熱い意見交換が行われました。
≪本学関係出演・出展者≫ ■開会セレモニー：アカペラサークル「Jelly Beans」 ■ブース出展：学生ボランティアセンター、復興girls&boys*、カッキー's、はまぎく、もりけん（「たきざわ検定」も合わせて紹介）、ガンライザー検定、たきざワッカソン、マンガ広報 ■トークセッション：小松一星さん（ソフトウェア情報学研究科）

岩手県立大学のニュースやイベントなど、旬のトピックスをご紹介します。

学生ファッションデザインで最優秀賞受賞！

岩手県県北広域振興局二戸地域センターが行った「学生のファッションデザイン募集」において、盛岡短期大学部2年の赤澤美智子さん、阿部ももさん、横道あかりさんのグループによる作品「ミルキーウェイ」が、製作部門及びデザイン部門ともに最優秀賞に選ばれました！　2月23日に二戸市内で開催された「北いわて学生デザインファッションショー」では、表彰式が行われるとともに北いわての業者がデザイン画を元に制作したドレスが披露され、来場者の注目を集めました。

経済産業省「社会人基礎力を育成する授業30選」に選出

ソフトウェア情報学部のキャリア学習科目「プロジェクト演習」が、経済産業省が実施した「社会人基礎力を育成する授業30選」に選ばれました。この授業は社会に出てからの仕事を見据え、グループ内での役割と行動を考え、実行できる力を身につけるために取り入れられている1～3学年混成の必修科目です。大学が実施する「社会で活躍していくために必要な力」を育成する取り組みとして北海道・東北地方では唯一選ばれ、3月9日に上智大学内で行われたシンポジウムで表彰されました。

興味を持ったら、まずやってみる。挑戦すれば得ることが必ずあるから。

地域貢献を使命の一つに掲げる
岩手県立大学。
学習や研究に励みながら
地域に役立つ力を磨く在学生と、
仕事を通じて
地域づくりに関わる卒業生、
それぞれの熱い思いを
紹介します。

在学生

母が看護師だったこともあり、中学時代から同じ道に進みたいと思うようになりました。看護師は、多様な視点が求められる仕事。専門学校よりも様々な学部がある総合大学で学ぶ方が、いろいろな人の意見を聞いたり、視野を広げられると考え、岩手県立大学に進学しました。

看護学部では1年の後期から病院実習が始まるのですが、患者さんと接することがとても楽しく、やり甲斐を感じています。実習では男性看護師だからこそ頼られることも多くあり、自分の果たすべき役割を再認識。また、患者と医師・看護師との関係性を見て、改めて患者目線に立った看護のあり方、医療のあり方について考えさせられました。

勉強以外にも、看護学部の学生会や大学の広報を担うキャンパス・アテンダント（CA）の一員としても活動。学生会では年間計画を立て、それを実現するプロセスが今後に役立つ経験になりましたし、CAでは大学生活の体験発表で、話の組み立て方や発表のスキルが鍛えられたと思います。他にも複数のサークルに入っているのですが、興味を持ったことはまず挑戦してみるのが自分のスタンス。やってみなければ、いいも悪いもわからないわけですから、体験して判断することが大事だと思っています。

この春から3年に進みますが、一つひとつの勉強を大事にしながらスキルアップすることが目標。いずれは患者さんの気持ちに寄り添える看護師となり、故郷のために働きたいと思っています。

佐藤（さとう）元喜（げんき）［岩手県立大学看護学部2年］

1993年一関市生まれ。一関第二高校卒業。中学からバドミントンを始め、中学時代は県大会1位、高校時代は県大会3位の成績を収め、大学でもバドミントン部に所属（他にも掛け持ちのサークル多数）。5人兄弟の長男で、小さい頃から近所や地域の人たちにお世話になったこともあり、人一倍「地元のために」という思いが強い。座右の銘は「有言実行」。

地域をつくる希望の星たち

人と人、心と心をつなぐボランティアを、岩手に定着させていくことが私の夢。

卒業生

小学校の時、養護学校に通っていたこともあり、福祉には深い興味を持っていました。当時、入院した先の院内学級でカウンセラーという仕事を知り、心理学を勉強したいと思うようになったんです。地元志向でもあったので、心理と福祉の両方が学べる社会福祉学部の福祉心理教育群に進学しました。

大学では勉強の傍ら、ボランティア活動に熱中。子どもたちの遊びのサポートや福祉系の情報誌の編集など、活動を通していろいろな形のボランティアがあることを知りました。気がつけば、人と人をつなげ、その関わりの中で自分も成長できる…そんなボランティアにのめり込み、これを仕事にしたいと思うようになっていたんです。

卒業後は岩手県社会福祉協議会へ。入局以来ずっと、ボランティアや福祉教育に関する研修会、災害時・平常時のボランティアのコーディネートなどに携わっています。私の仕事は中間支援中心です。それだけに相手の話をよく聞き、何が目的か、何が必要なのか、その先を読んで判断することが求められます。特に震災ボランティアにはいろいろな目的や意識を持った人が多く、そこを見極めるのが大変でしたね。

震災から3年が経ち、今後は岩手に平常時にも活動するボランティアを定着させていくことが課題です。そのためにやれることを、みんなで考え、動いていきたい。自分にできることを積み重ね、少しでも前に進みたいと思っています。

田口（たぐち）美樹（みき）［岩手県社会福祉協議会地域福祉企画部］

1986年盛岡市生まれ。岩手県立大学社会福祉学部福祉臨床学科卒業。高校時代からボランティア活動を始め、大学では「あいもり」「風土熱人R」「学生ボランティアセンター」などの団体に所属。趣味はドライブとライヴに行くこと。小学生の時に「あなたがいるだけで周りが幸せになるような人になりなさい」と言われた言葉を、ずっと大事にしている。

岩手県社会福祉協議会ウェブページ　http://www.iwate-shakyo.or.jp

県大いいね！ キャンパス・アテンダントがご案内します！

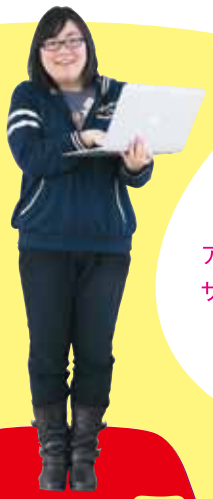
キャンパスナビ

学生目線で大学の魅力を楽しく発信するキャンパス・アテンダント。現在、40名の学生たちが活躍中です。そんな彼らが、大学の知られざる魅力を紹介するのがこのコーナー。毎回ユニークなネタが飛び出しますので、ご期待ください！

Vol.7／キャンパスライフを支える学生たち「3A」をご紹介！

TA、LA、CAって、一体なんのことだと思いますか。呼び名はそれぞれですが、これはすべてキャンパスライフをサポートする学生たちのこと。大学広報や図書館の案内、授業の補助など、様々なシーンで活躍する学生たちをご紹介します。

TA ティーチング アシスタント



授業での「わからない」をアシスト！

授業のサポートを行うのが、大学院生・学部生による「ティーチング・アシスタント」。例えばソフトウェア情報学部では授業によって数名のTAが付き、授業でつまずいたり、困っている学生にわかりやすく指導します。歳の近い先輩だから聞きやすい、わかりやすいと好評です。

学生同士だから親しみやすいよね！

岩手県立大学には学生サポーターがいっぱい！

学生を支える学生たちは、ここでご紹介する「3A」だけではありません。大学生活の相談にのる「ピアサポーター」、授業の際に聴覚障がいのある学生を支援する「ノートテイカー」、留学生の学習や生活をバックアップする「チューター」など、いろいろな場面で活躍するサポーターがいます。事前研修や支援活動を通して、参加する学生自身もステップアップしているんですよ。

サポートしながら自分も成長できるんだね！

LA ライブラリー アテンダント

図書館のことならおまかせあれ！

学生が気軽に図書館を利用できるようなサポートや、様々な企画を行うのが「ライブラリー・アテンダント」。お目当ての本探しの手伝いや新入生などへの図書館案内、利用者講習会のアシスタントを行うほか、LAおすすめ図書の企画展示や読書会の開催、学生目線での選書なども行っています。

CA キャンパス アテンダント

大学広報の顔として魅力をアピール！

学生が主体となって大学の魅力を広報するのが「キャンパス・アテンダント」。大学見学に来た高校生等にキャンパスを案内するガイドを中心に、学生生活の体験談発表や高校訪問、高校生向けの進路相談を行う「CA café」の主催など、多彩な活動を行っているんですよ。

私たちと一緒に活動しようよ！

編集後記

特集2の「IPU-Eプロジェクト」に、今回私はコーディネーターとしても関わりました。学生の取り組みについては結果はもちろんですが、一番大事なのは「プロセス」から何を学び、自らの糧とするかということ。学生に伴走するなかで常に私の頭の中にあったのは、サントリー創業者鳥井信治郎氏の名言「やってみなはれ」でした。困難に対しても、まずはぶつかってみてもらう。その中で得た経験が今後の様々な局面で応用され、苦難をも乗り越える力になるはずと期待しています。（広報担当・鈴木亨）

特集1では体系的にスキルを自習できるPC研修システムの開発について紹介しています。しくみを聞き、システムの画面を見て思ったのは、「自分もこのシステムで勉強したい！」でした。その後、研究メンバーが実際に大船渡市で調査を行う様子を取材。こうして現地に通い、支援員やサポートスタッフの方々が今何を必要としているかを調べたからこそ、魅力を感じるシステムになったのだと納得しました。ICTを活用した、未来につながる復興支援の形を見たと感じた取材でした。（広報担当・三輪陽子）

トピックスでも紹介した「ミライトークカフェ」に、取材として今回初めて参加しました。どのような内容なのか想像ができませんでしたが、実際に参加してみると卒業生の就職先などの情報や学生に対するアドバイスを聞くことができるため、今後の学生生活に有効活用できる情報が得られる貴重な場だと感じました。私もそろそろ進路について考えねばならない時期です。今回は取材としての参加でしたが、来年は一人の学生として参加してみたいと思います。（出版委員会・堀田健仁）

岩手県立大学 Iwate Prefectural University 企画室 協力：岩手県立大学出版委員会
〒020-0693 岩手県滝沢市巣子152-52
TEL.019-694-2000 FAX.019-694-2001
[URL] http://www.iwate-pu.ac.jp/
[e-mail] management@ml.iwate-pu.ac.jp
発行：2014年3月31日

表紙や誌面に使用している六角形の［ハニカム構造］は、強固な形といわれるもの。岩手県立大学と地域などとの「結びつき・つながり」の強さを表しています。

Copyright © 2014 IPU All Right Reserved.